

甘美な決意

シッダ・ヨーギによる感謝の体験談

これは、パリで評判のパティシエで、現在 30 代になった私の息子の物語です。

それは 1990 年、グルデーヴ・シッダ・ピートゥでのことです。息子は当時2歳でした。グルマーイが中庭でダルシャンを与えていました。息子は、「彼女からお菓子をもらってきて」と私に頼みました。なぜなら彼は、他の子どもたちに彼女がお菓子を与えているのを見たからです。

私は彼に言いました。「お菓子が欲しいのなら、行って、グルマーイに頼んでみなさい」。すると彼は立ち上がって、ダルシャンを受け取り、中庭を立ち去る人々の間を通り抜けて行き、ダルシャンでグルマーイの助手をしていた若い女性に話し掛けようとしていました。けれども彼はフランス語しか話さないで、彼女は理解できませんでした。彼はお菓子をもらえないまま戻ってきました。

彼はもう一度私に頼みました。もう一度、私は彼に言いました。「お菓子が欲しいのなら、行って、グルマーイに頼んでみなさい」。彼はもう一度やってみました。けれども、また、お菓子をもらえないまま戻ってきました。これが3回、起こりました。

4回目のことです。ダルシャンの助手は、息子が言いたいことを理解しました。彼女はグルマーイに、彼はお菓子をもらえますかと、尋ねました。グルマーイは言いました。「いいえ！」

息子は衝撃を受け、とても悲しくなり、泣きながら戻ってきました。

数分間が過ぎて、ダルシャンの終わりに、誰もが静かに座っていました。すると、突然息子が立ち上がり、駆け出して、跳ね回りながら叫んでいました。「オーム・ナマー・シヴァーヤ、オーム・ナマー・シヴァーヤ、オーム・ナマー・シヴァーヤ！」

グルマーイと中庭にいた誰もが笑っていました。息子は「オーム・ナマー・シヴァーヤ、オーム・ナマー・シヴァーヤ…」と言いながら、グルマーイの前のあちらこちらを走り回り続けました。

その時私は、グルマーイがほんの数秒で食べ終えてしまうただのお菓子に「いいえ」と言ったことを理解しました。代わりに彼女は、シャクティパート・ディークシャーを通して、マントラ、オーム・ナマー・シヴァーヤと共に内なる至福の永遠の甘美さを息子に与えました。

数年後、息子は10代になると、セーヴァーをささげるためにシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムを訪れました。彼はアムリット・カフェで、パンや焼き菓子などを焼きました。そしてこのセーヴァーをささげたことで、お菓子作りへの情熱と才能を発見しました。彼はフランスに戻ると、より高い技術を身に付けるために製菓学校に入学しました。課程を修了してから、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムに戻りました。数年間、SYDA ファウンデーションでスタッフとして奉仕して、アーシュラムでグルマーイと皆のためにお菓子を作りました。

最近息子は、グルマーイは彼を「スウィートボーイ」(訳注:sweet は、いとしい、甘美な、お菓子などの意味)と呼ぶのだと私に言いました。それは、彼のグルマーイとの最初の体験を思い出させてくれました。そして、その時以来、甘美さと決意の資質が、彼の人生の中心にあり続けているのだと、私は思います。

～フランス、パリのシッダ・ヨーギ